

『デイヴィッド・コパフィールド』に おける父の不在

近 藤 浩

1

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の作品『デイヴィッド・コパフィールド』 (*The Personal History of David Copperfield*, 1849–50) はタイトルと同名の主人公が、自らの伝記を書き綴るという形式をとっている。30歳代半ばに到達し、高名な作家となったデイヴィッドは、自らの半生を顧みることを目的として、出生時から今日に至るまでの自分の発展の歴史を、ありのままに語っていくのである。

自己の発展は様々な人間たちとの出会いという糧を必要とするが、デイヴィッドには、どのようにしても果たしえない出会いがある。それは実の父親との出会いである。父親の死後6ヶ月が経過してからこの世に生を受けたデイヴィッドは、父親の面影すら知らない。男の子にとって、男親を持たないことは、従うべき、あるいは反抗すべき同性の模範を欠くということであり、父親の不在は、デイヴィッドにとって大きな意味を持つはずである。実際第1章で、母親のクララ (Clara Copperfield) が自分自身とこれから生まれる「見知らぬ父なし子」(1章, 3頁)の将来を案じる様は、子供にとって父親がいかに重要な存在であることを示している。経済上の問題はもちろんのこと、気弱で子供っぽい母親にとっ

ては、子供をいかに導き育てていくかということが、大きな不安となったはずである。後のエドワード・マードストーン (Edward Murdstone) との再婚にも、子供に父親役の人間を補ってやりたいという母親の願いが隠されていると見るべきであろう。死の直前にクララはこう言っている。「神様が私の父親を持たない男の子をお守りくださいますように！」(9章, 132頁)。

ディケンズは、デイヴィッドの歴史が父親のない人間のそれであることを、明確に示しておきたいと考えていたようである。ディケンズは作品タイトルの候補をあらかじめ友人のジョン・フォスター (John Forster) に知らせて彼の意見を求めたが、その6つの候補のうちの4つに、デイヴィッドが2世であることを示す言葉を含めている。例えば “Mr. David Copperfield the Younger” (Forster, 2, 78頁) や “*David Copperfield, Junior*” (Forster, 2, 78頁) のように。この点は、ディケンズが最終的にこれで行きたいとフォスターに伝えたタイトルも同様である。そのタイトルは “The Personal History, Adventures, Experience, and Observation of David Copperfield the Younger, of Blunderstone Rookery, which he never meant to be published on any account” (Forster, 2, 79頁) であった。現在私たちが目にするタイトルはもっと簡潔なものになっている。しかし、第1章の冒頭でデイヴィッドが自分は「父親の死後に生まれた子供」(1章, 2頁) であると説明している点や、同章の最後で「かつては [父] であった人の、その人なしには決して私は生まれてこなかった人の灰と塵の上にある塚」(1章, 12頁) を月が照らしている様子を思い出している点も含めて考えれば、ディケンズがデイヴィッドをその父親に連なる存在、あるいは不運にも父親を持たない存在であることを、これから作品の世界に入り込もうとする読者に印象づけようという意図を持っていたことは否めない。

となると、『デイヴィッド』においては父親不在という前提が必要不

可欠になっていることになる。ディケンズはどのような目的を持って父親を持たぬ息子の半生を描くのか。本小論ではこの問題について考えてみたいのである。

2

まず、ディケンズが主人公に父親の必要性を感じさせているかという点を考えてみたい。次の引用がその点に対する手がかりを与えてくれそうである。デイヴィッドは9歳に満たないころ、冷酷で厳格な義理の父マードストーンによって、母親から引き離されてセイラム・ハウス (Salem House) という学校へ送られる。引用の場面は、デイヴィッドが他の乗客たちと共に馬車に乗って学校へ向かう途中のものである。

真夏の天気で、夕方はとても心地よかった。私たちがいる村を通り過ぎるとき、私はそこの家々の中の様子はどうなのだろうか、住人たちは何をしているのだろうかと思像した。そして少年たちが私たちの後を追い、馬車の後部に乗って、少しの間そこでぶらさがっていたとき、私はこの少年たちの父親は生きていて、家では幸せなのだろうかと思った。(5章, 70頁)

デイヴィッドは父親の存在と少年たちの幸福を結びつけて考えており、家庭における父親の必要性を感じていると言えそうである。この場面以降にも、デイヴィッドが同じ必要性を感じていると思われる出来事が起こる。母親の死後、デイヴィッドはマードストーンによって苦しい自活を強いられ、ロンドンにあるマードストーン・グリーンビー商会 (Murdstone and Grinby's warehouse) で、惨めな労働者として働かなければならなく

なってしまう。この時デイヴィッドはわずか10歳の年齢である。将来に何の望みも持てないその屈辱の生活から逃れるため、デイヴィッドはドーヴァーに住む大伯母ベッチー・トロットウッド (Betsey Trotwood) に保護を求めることになる。そして、この大伯母がマードストーンと彼の擁護者である姉から直接に話を聞き、デイヴィッドを引き取るかどうかの決定を下すことになる。義理の父マードストーンがデイヴィッドを立派な仕事に就けてやったと主張すると、大伯母は彼に自分の子供でも同じ職業に就けたかと問い返す。これに対してマードストーン姉弟はノーだと断言する。そばでこれを聞いていたデイヴィッドは、マードストーン姉弟に対する憎しみを訴え、自分を保護してくれるように大伯母に懇願する。その時の様子をデイヴィッド (語り手) は次のように述べるのである。

…私は伯母に嘆願したのだ——今となってはどんな言葉を使ったか忘れてしまっているが、当時はその言葉で自分自身大いに感動したことを覚えている——私の友人となって私を守ってほしいと、父のためにそうしてほしいと。(14章, 212頁)

デイヴィッド (語り手) は苦しい自活をするはめになった当時を思い出し、「今では世間を十分に知っており、何かにひどく驚くという能力をほとんど無くしてしまっているが、私があのような年齢であんなにも簡単に捨てられてしまったことには、今になっても、ある程度驚きを感じるのである。」(11章, 154頁) と述べて、自分に対する義理の父親の仕打ちがいかに不当であるかを訴えている。自分の父親が生きていればこのような仕打ちを受けずに済んだことを、幼いデイヴィッドは確信していたはずである。だからこそ父の名を出して、大伯母に庇護を求めたのである。こうしてみると、デイヴィッドは父親の必要性を肯定している、と言ってよい。

父親の必要性の肯定は、単に保護者、扶養者として父親がいてくれればよいという程度のことを意味するのか、あるいは、息子を導く模範として父親が不可欠だということまでも含むのか。これが次の問題点である。もしデイヴィッドが人生の模範を必要とするなら、作品に登場する他の父親たちの言動の中にそれを求めていくはずである。そこでデイヴィッドと彼が親しみを抱く父親たちとの関係に注目してみたい。

まずはデイヴィッドがマードストーン・グリーンビー商会で働いている間に下宿していた家の主人、ウィルキンズ・ミコーバー (Wilkins Micawber) を取り上げることにしよう。ミコーバーの一家は作品中で唯一、両親と子供たちの揃った完璧な家族構成を持ち、デイヴィッドに家庭的経験を提供する存在である。そしてミコーバー夫妻とデイヴィッドの間には、「ばかげたほどの年齢差があるにもかかわらず」(11章, 163頁)、「奇妙な対等関係の友情」(11章, 163頁)が成立する。しかしデイヴィッドは、楽天的な性格ゆえに長期的な人生計画を持たず、借金ばかりこしらえているミコーバーを尊敬するまでには至らない。やがてミコーバーがキングズ・ベンチ債務者監獄 (King's Bench Prison) に収容されたとき、デイヴィッドはミコーバーに面会し、彼の不幸を思っ心から涙するものの、他方では彼の行動に対して納得のいかないものを感じるのである。この点をよく表しているのは、監獄内で仲間の囚人たちのために、負債に基づく拘留を定めた法律の改正を下院議会に訴えるための請願書を作成しているミコーバーに対する、デイヴィッドの評価である。デイヴィッド曰く、ミコーバーは「…完全な善人で、自分のこと以外のことにならどんなことでも誰にもひけをとらないほど行動的になる人間で、全然自分の利益になりそうにないことのために忙しくしているときほど満足を感じることはなかった…」(11章, 168頁) デイヴィッドは、ミコーバーの善良さ、勤勉さ、そして活力を評価しつつも、自分と自分の家族のためには大して力を発揮できない彼をシニカルに見つめているのである。

デイヴィッドがミコーバーを模範とするとは考えられない。

ミコーバーは、言ってみれば、落ちぶれた父親である。では、立派な地位のある父親の場合はどうなのか。例えば、デイヴィッドがカンタベリーにある学校へ通うために下宿する家の主人ウィックフィールド(Wickfield)は、法律事務所を営んでおり、娘のアグネス(Agnes Wickfield)を非常に大切にしている。しかし、デイヴィッドはウィックフィールドに関して「[アグネス]がいなければ彼は食事もできないだろうと疑った。」(15章, 224頁)と述べて、彼の娘への溺愛ぶりを指摘する。しかもデイヴィッドは、悪徳法律家ユライア・ヒープ(Uriah Heep)の術策にはまり、精神的に落ち込んでいくウィックフィールドを同情の目で見つめていく。そして行動力を失ったウィックフィールドが「子供みたいに」(35章, 519頁)娘から世話を焼かれているとまで考える。デイヴィッドが父親としてのウィックフィールドから何かを学ぼうとしている様子は確認できないのである。次にデイヴィッドが通うカンタベリーの学校の経営者ストロング博士(Strong)の場合を見てみよう。博士は父親というわけではないが、自分の娘と言っても通用するほどに若い妻アニー(Annie Strong)に「父親のような」(16章, 238頁)愛情の示し方をしている。しかしデイヴィッドは、博士が「最も人類に対して疑いを抱かない」(16章, 230頁)人であると聞き、実際にそれを自分の目で確かめている。しかもデイヴィッドは、博士が自らも認める観察力のなさによって、妻とも娘とも言うべきアニーの心を見抜けないのを齒がゆく思うことがしばしばある。そして尊敬する恩師である博士から、デイヴィッドが直接に指導を受ける場面もない。

要するに、デイヴィッド(語り手)が「書かれた記憶」(48章, 690頁)と定義する本作品の中では、父親あるいは父親的な役割を持つ人物たちを模範とする場面がないのである。もっとも漁師のダニエル・ペゴティー(Daniel Peggotty)の場合は別に考慮しなければならないかもしれない。

ペゴティーは孤児となった甥のハム (Ham Peggotty) と姪のエミリー (Emily) の父親代わりをしている。エミリーにとっての「第2の父親」(32章, 455頁) であり、ハムにとっても同様である。デイヴィッド (語り手) はペゴティーについて「…もし今までに私に愛し尊敬する人があったとすれば、その男を心の底から愛し尊敬していた。」(57章, 811頁) と述懐する。しかし、その愛と尊敬から生まれるものは、ペゴティーへのできるかぎりの援助でしかない。身分差のためか、デイヴィッドにとってのペゴティーは同性の模範というよりは、支援の対象なのだ。このように見てくると、デイヴィッドは父親的指導力を必要としない存在とされているように思えてくる。

実際デイヴィッドには、父親の助言や指導は不要だと考えているふしがある。デイヴィッドと彼の友人ジェームズ・ステアフォース (James Steerforth) との会話の場面を見てみよう。ステアフォースはデイヴィッドがセイラム・ハウスで知り合った人物で、デイヴィッドよりも6歳ほど年上で、やはり父親がいない。ステアフォースは自由闊達な行動力を持ち、他人を支配下に置いてしまうような強さを持つ。しかしその反面、自分が何をしでかすかわからないという恐れも抱いている。それが表に出てきたのが次の引用の場面である。

「デイヴィッド、これまでの20年間僕に思慮深い父親がいてくれたら良かったと思うんだよ！」

「ステアフォースさん、どうかされたんですか？」

「僕がもっとよい導きを受けていたら本当に良かったのに！」と彼は叫んだ。「自分で自分をもっと上手に導ければ本当にいいんだがなあ！」

彼の態度に激しい落胆ぶりがうかがえて、それが私を非常に驚かせた。彼がこんなにも彼らしくなくなるなんて、私には想像もできな

かったのである。(22章, 322頁)

スティアフォースのことを自分の「導き手」(25章, 367頁)と呼び、デイヴィッドはスティアフォースの生き方を手本にしている。したがって、デイヴィッドがスティアフォースの変化に対して覚える驚きは、彼ほどの人物にも父親が必要なのかという意外性に基づいていると言える。デイヴィッドがスティアフォースから学ぼうとするのは、父親なき息子の立派な生き様なのである。

この他にも、デイヴィッドが父親の助言や指導を不要とみなしていることを感じ取れる事実がある。ストロング博士の学校へ入学したばかりのころ、デイヴィッドは父親のいる家庭に育っていれば経験するはずのない惨めな暮らしや労働をしてきたことを意識して、「…普通の小さな生徒として〔学校へ〕来ることは一種の詐欺行為だと半分本気になって考えた。」(16章, 228頁)と述べるが、自助努力だけでその意識を克服してしまう。そして次の引用のように述べるまでになる。

…非常に短期間で、マードストーン・グリーンビー商会での生活が遠く感じられるようになったので、私はそんな生活をしていたことをほとんど信じられなくなったし、また現在の生活によく慣れてきたので、私は長い間今のような生活を送ってきたように思えた。(16章, 237頁)

こうした自助努力による自らの向上が、作品全体に渡って強調される。17歳で社会に出た後、新聞で議会報道の仕事に就くために、「…難しさの点では6ヶ国語に精通することにも等しい…」(36章, 527頁)と言われる速記術を猛烈な努力で修得していった過程や、21歳になると著述業にも手を染めて着々と評判を上げていったことなどが詳しく語られる。そして25歳前後で作家としての地位を確立し、理想の女性アグネスとの

結婚が決まったときも、それまでの自分の努力を訴えてくる。アグネスを抱きしめながら、デイヴィッドは次の引用のように思いを巡らせる。

そのとき私の心には長い何マイルもの道のりが思い浮かんできた。見捨てられほったらかしにされたボロボロの服を着た少年が、足を引きずりながら歩くのが見えた。その少年は今私の胸の上で鼓動している胸を、自分のものと呼べる運命にあったのである。(62章, 863頁)

ここで言われている長旅は、かつてのマードストーン・グリーンビー商会からの逃亡の旅だけでなく、それまでの人生の道のりも指している。哀れな孤児が自分の力で最高の幸福を手に入れるまでになったことが、上の引用中に強調されているのである。

こうしてみると『デイヴィッド』は、主人公が父親的指導を受けることなく人間的成長を遂げ、確固とした社会的地位を得る過程が描き込まれた作品である、と考えることができるだろう。この点に関連したもう1つの興味深い事実は、主人公の実の父親に対する関心の薄さである。デイヴィッドが父親に関する情報を得る機会はいくらでもある。例えば第9章で葬儀屋を営むオーマー (Omer) が幼いデイヴィッドに父親の身の丈などを教える場面があるが、デイヴィッドはその機会を利用して父親のことを聞き出そうとはしない。作品の終わり近くの第59章で、医師チリップ (Chillip) がデイヴィッドの父親似に言及する場面では、デイヴィッドは「父親を目にするという喜びは経験したことはありませんから…。」(59章, 831頁)と答えるのみで、その話を続けようとししない。加えてデイヴィッドは、父をよく知る大伯母トロットウッドにさえ、自分から父親の情報を求めないのである。こうした点は、父親の影響を受けたくないという主人公の態度を示している。総じて『デイヴィッド』は、父親とは違う者になることを目指し、父親に頼らず成功したのであると

いう主人公（語り手）の主張を伝えることを、1つの大きな目的として
いると考えられるのである。

この主張はデイヴィッドだけのものではなかろう。アンガス・ウィル
ソン（Angus Wilson）は「ディケンズにとって、男とは自分自身で決ま
るもの、自分一人で決まるものなのである。」（Wilson, 16頁）と述べて
いる。また、フォースターは「[ディケンズの] 性質に潜む自分の決定
を排除できないものとする何か」（Forster, 1, 35頁）を発見している。そ
のようなディケンズが、自分から父親の助言や忠告を求めたとは思えな
い。ディケンズは独力で人気作家の地位を獲得し、借金ばかりしている
父親とは違う優れた者になりえたのである。それゆえ、デイヴィッドと
ディケンズは同じ主張を共有していると思われるのである。

3

父親の、あるいは父親的な指導を求めなかった人間が作家としてどの
ような作品を書くか、というのは興味深い問題である。デイヴィッドの
作品については、ほとんど何も語られていない。しかし、その作品の中
では良好な父と息子の関係が描かれることは少ないのではないか、とい
う推測をすることは可能である。デイヴィッドは義父マードストーンを憎
んでいる。義父の愛情なき冷酷な指導を受けたことが、その一因である。
その義父が人生で初めて目にした父親であるだけに、父親を名乗る人間
に対するデイヴィッドの目は厳しいものになっていると考えられる。実
際、デイヴィッドはミコーバー（子供に対する愛情はたっぷり持っている
が、その楽天的性格と家庭の経済状況の悪さのため、自分の息子の将
来についてまで心配していなかったのであろうが）の息子に対する義務
の不履行を敏感に感じ取る。ミコーバーの長男が父親からパブで歌う仕

事を咎められ、「何かの仕事に就くように育てられていないのに、自分に何かできることがあるのか？」(52章, 762頁)と尋ねて、教育に関する不満を爆発させることがある。何気ない父と息子の言い争いの場面で、息子の父に対する憤りがデイヴィッドの脳裏に詳しく記憶されているのである。またデイヴィッドは父親が息子に悪影響を及ぼすこともあるのも知っている。ユライア・ヒープが、父親から紳士たちの前では「腰を低くしろ…そうすればお前は成功する。」(39章, 575頁)と、やかましく言われたのだと言うと、デイヴィッドは、ヒープが「卑しく、容赦がなく、復讐心に満ちた精神」(39章, 575頁)を備えたのは父親が原因であると、即座に考える。「私は収穫物を見てきたが、その種子のことを考えたことがなかったのだ。」(39章, 575頁)と、デイヴィッドは言うのである。作家が自分の経験を基盤に作品と書くものとするれば、父と息子の関係についての芳しからぬ経験的知識は、父親に範を求めぬ態度、父親に頼らぬ成功と絡み合っ、て、デイヴィッドが理想的な父と息子の関係を描くことを邪魔する可能性が十分にあるのである。

円満な父と息子の関係をあまり描かない作家であるというのは、ディケンズに当てはまる点である。例えば『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*, 1841)では、エドワード・チェスター (Edward Chester) とジョー・ウィレット (Joe Willet) は、父親の無分別に反発してアメリカに移住してしまう。また『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)においても、冷徹な商人ポール・ドンビー (Paul Dombey) と幼い息子 (父親と同名) の関係は、親子の情愛を交わすことなく、息子の早すぎる死によって、終わりを告げてしまう。ディケンズがこのような作家になった原因の1つは、彼の子供時代にあるだろう。ディケンズは、子供のころ、あまり父親にかまってもらえなかったという記憶を持っている。またディケンズには、(苦しい家計を補うためではあったが) 両親によって靴墨工場に働きに出され、将来の夢を失ってしまったという絶望感を抱いて

いた時期がある。その当時、ディケンズは12歳であった。父親がディケンズの働く工場を訪れた回数は、ディケンズの記憶によれば、せいぜい2回であった。そして父親が工場を訪問した折には、ディケンズは、父親が惨めな気持ちで働いている自分を見て何とも思わないのを、不思議に感じていた。子供のころに根づいた父親に対する不信感が、ディケンズに父親という存在を厳しい目で見つめさせたと考えられる。自らの手で人生を切り開いて成功を取めたことも、ディケンズが父親の助力を求める登場人物を創造することを妨げる原因の1つになったであろう。このように考えれば、ディケンズ作品中に理想的な父と息子が少ないことも、ある程度まで説明がつくのである。

他にも原因はあるだろうが、現時点ではわからない。しかし、少なくとも父親という存在に対する不信の念と父親に依存しない人生は、ディケンズとデイヴィッドに共通するところであり、デイヴィッドの作品に登場する息子たちは、恐らく父親に対して厳しい目を向けていることであろう。

ただし、デイヴィッドも彼の生みの親であるディケンズも、決して父親を悪玉のように考えているわけではない。先に確認したように、デイヴィッドは息子にとっての父親の必要性までも否定していないのである。ディケンズ自身も、いくら父親の金銭問題に悩まされたといっても、やはり父親を愛していた。暖かな家庭を提供し、なお人生のよき模範になってくれる父親がいたならば、ディケンズはその父親に対して賞賛を与えたはずである。その証拠に、息子の模範となることを願うミコーバーは、移住先のオーストラリアで努力を实らせ、保安官として周囲の人々の尊敬を集めるまでになるのである。そのミコーバーは、子供たちの父親である自分を指して、“the Author of their being” (52章, 760頁) と言っている。ディケンズもまた、息子の人生の作者としての良き父親を持つことを願っていたのかもしれない。

*本稿は平成11年10月30日にノートルダム清心女子大学で開催された日本英文学会中国四国支部第52回大会で発表した原稿に修正・加筆したものである。

引用文献

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. 1970. London: Panther Books, 1983.

Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 2vols. 1927. London: J.M. Dent & Sons Ltd, 1980.

Charles Dickens, *The Oxford Illustrated Dickens: The Personal History of David Copperfield*. London: Oxford UP, 1987.